

巻頭言

国際経営研究所所長 行川 一郎

2016年は欧州でのテロや難民問題、米国大統領選挙など政治問題が大きな話題となった年であった。日本では昨年(2015年)実施の国勢調査確定値を10月26日に総務省が発表し、マスメディアには総人口1億2709万4745人という数値が統計開始以来初の減少というキャプションとともに踊った年であった。実は人口については当研究所広報誌『国経研だよりNo.49』でも触れさせていただいたのだが、人口減少下の社会におけるコミュニティ維持と経済発展の方途模索は愈々喫緊の課題となっている。人間の数が多い少ないは問題ではなく質の問題であるとか、埋もれた才能や可能性が活かされない社会が問題なのでそれを変えさえすればよい、という論はそういえば幾度もなく聞いてきた。人口爆発で日本は……と嘆息があがった時代には人こそ宝、日本の競争力はますます高まり得ると主張され、少子化が深刻度を増せば能力開発に力を注げと語られ、高齢者人口が急増する今日にあってはシルバー層こそが戦力となる人材、と位置づけようとしている。どれも諒とするところを持ち合わせた主張ではある。さらに言えば実行の仕方に懸念はあるものの外国人労働者の受け入れも諸外国でとうに行われてきた知恵の一つである。

日本の経済力衰退と人口減少、大都市一極集中と地方の過疎化が並べて論じられ、深刻な課題として関心が集められるようになって久しい。2016年は「グローバル」の持つ翳の部分が深刻さをもって取り上げられた年だったが、日本の「ローカル」が抱える難題解決への道も強く語られなければならない。

個人的には両者ともにその危機解決にはUNION（団結）とWISDOM（英知）が鍵になると考えている。叡智という言葉を使うと神や統率者の知になるらしいので英知にしたが、正に危機(リスク)の時期こそ飛躍の好機と前向きにとらえて困難に挑戦していくべきであろう。本号の特集テーマを「リスク・挑戦」としたが、奇しくもこれは我々が等しく心に抱くべき現代と将来に向け

た認識なのである。

さて、企業ビジネスや経営、国際経営をはじめとした各種領域をそれぞれに範疇とする当研究所所員は専任、客員ともに特色ある専門分野の研究者が所属しているので実に多方面、多次元に広がる形で本号に寄稿していただけた。

本号では特集テーマの部門に1篇掲載の他、一般の論文3篇、研究ノート2篇、査読論文2篇（和文1篇、独文1篇）を掲載した。それに加えて共同研究プロジェクト中間報告等の報文を載せ、広くご清覧をいただくこととなった。近時、本フォーラムは多くの玉稿を頂戴し、編集委員も事務局も繁多を極めているが、研究員の意欲に応えるべく関係者は努力を重ねており、今後ご協力を一層のものとしていくように各位にはお願いしたい。広くお力添えを賜った成果としての本誌は今号もどの論文、報文とも皆様の関心を強く惹くと確信している。それぞれ日頃の研究員の研鑽と研究の結実である。

今後とも成果発表と報告の場として本誌を支え、成長させていくために、ともに努力していきたいと弊職として心新たにしているところである。査読付き論文を本誌に掲載する体制も整い投稿も継続して行われている。本誌の一層の向上をはかっていくためにも所員はじめ関係各位のご理解とご協力を旧に倍して、僭越ながらお願い申し上げる次第である。